

# 単純な造形の魅力

## 一字作 無 目引く

十二月十九日まで、新潟市芸術祭2006「良寛と慈愛の世界展」が新潟市の敦井美術館で開催されている。

敦井美術館といえは、日本画、洋画、工芸、彫鍍金など、国の重要文化財を含む一千三百点以上の質量ともにすぐれたコレクションで知られる

十二月十九日まで、新全作品に及んだ。『良寛 巖、木庵などの墨跡など』、かけては定評のある方々、新潟市芸術祭2006「良寛と慈愛の世界展」が新潟市の敦井美術館で開催されている。

敦井美術館といえは、日本画、洋画、工芸、彫鍍金など、国の重要文化財を含む一千三百点以上の質量ともにすぐれたコレクションで知られる

「良寛と慈愛の世界展」に寄せて 加藤 信一

も、「無」

一字作

は、この一点のみであることがわかった。良寛の「無」は単純化された造形に、うねるような大らかな筆の運びが、何とも魅力的である。

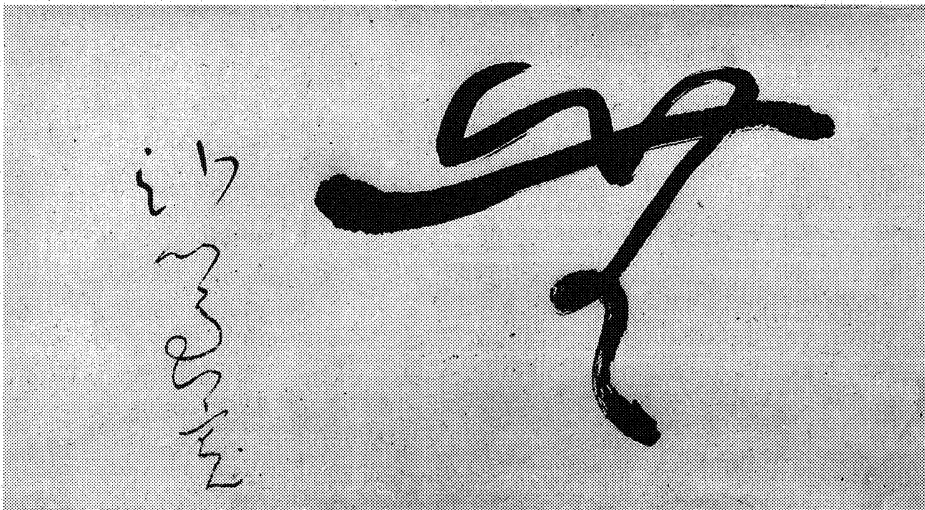
そのほか楷書の「地震後の詩」、扇面俳句の「秋ひより」、かなの「かすみたつ」「うつせみの」、草書作の「自参曹溪道」「生涯懶立身」ほか、敦井コレクションの精髓、良寛の慈愛の世界が、今

まにまに目の前に現出している。

(新潟大学名誉教授・良寛研究所長)

が、それらの中で忘れることのできないのが、良寛をはじめとする書のコレクションである。

私が敦井家の良寛を初めて拝見させていただいたのは、昭和四十八(一九七三)年であった。初代理事長・館長を務められた故敦井栄吉氏のご自宅で、二曲屏風をはじめ



良寛書「無」

「良寛と慈愛の世界展」に寄せて 加藤 信一

も、「無」

一字作

は、この一点のみであることがわかった。良寛の「無」は単純化された造形に、うねるような大らかな筆の運びが、何とも魅力的である。

そのほか楷書の「地震後の詩」、扇面俳句の「秋ひより」、かなの「かすみたつ」「うつせみの」、草書作の「自参曹溪道」「生涯懶立身」ほか、敦井コレクションの精髓、良寛の慈愛の世界が、今

まにまに目の前に現出している。

(新潟大学名誉教授・良寛研究所長)